北部タイ3大学の日本語専攻在籍者に対する日本語既習・未習に関する統計調査
——北部タイ日本語教師会による2008年2月の調査結果——

海老原　智治・小川　都恵子・二口　和紀子・八巻　一三男・**Saranya KONGJIT**・
Saranich PHALAPANYA・小浦方　理恵・塚本　紘子・志摩　由美子

1. 目的

本稿は、北部タイ日本語教師会（ชมรมครูภาษาญี่ปุ่นภาคเหนือ The Japanese Language Teachers' Association of Northern Thailand / JLTANT : 2007年度会長 サランヤー・コンジット）が、2008年2月に実施の北部タイ3大学の日本語専攻及び在籍学生に対する調査で収集した、「大学日本語専攻入学者の日本語既習者・未習者」に関する在籍数の統計的データと、各大学の日本語既習者・未習者の授業クラス分けの有無及びそれに対する学生の意見を整理し、タイの日本語教育の現状に関する基礎資料として公開することを目的とする。

本稿の作成は、北部タイ日本語教師会2007年度運営委員のうちこの調査を行った委員の共同執筆による。分担は稿末に付記する。

2. 調査の経緯

北部タイ日本語教師会では、2008年3月8日（土）に2007年度第4回例会を1日セミナーとしてチェンマイ大学で開催した。午前のセッションでは、日本語を開設する大学と中等学校に共通した関心課題として、テーマ「大学日本語専攻入学者の日本語既習・未習問題」を取り上げた。

本会では2008年2月11～15日に、このセッションで報告する北部タイの機関横断的な基礎データ取得のためのアンケート調査を、チェンマイ大学・チェンマイラチャパット大学・ファーイースタン大学にご協力を頂いて、3大学の日本語専攻在籍学生に対して実施した。調査結果はセッションの中で教師会から報告した。

3. 問題の所在　タイの中等日本語教育と、大学日本語教育における「日本語既習者・未習者」

現在、タイのほとんどの大学の日本語専攻には、在籍学生に日本語の「既習者」と「未習者」が混在する状況にあることが広く知られている。大学入学時点で日本語力がまだゼロの未習者と、そうでない既習者が混在する状況は、指導上の大きな対処課題となっている。

このような状況を生んでいる理由は、ほとんどの大学の日本語専攻が中等教育での日本語履修実績の有無に関わらず入学応募が可能な一方で、中等教育では日本語学習者数が増加を続けているためである。背景には、1981年のタイ中等教育後期課程カリキュラムへの日本語の第2外国語

のひとつとしての採用と、1994年からタイ教育省・国際交流基金バンコク日本文化センター共催「中等学校現職職員日本語教員新規養成講座」が開始されてタイ人中等日本語教員の組織的な養成が進み、日本語を開設する中等学校の数が増加していることが挙げられる。

表1に、国際交流基金の調査による1990年から2006年までのタイの初中等教育の日本語学習者数・日本語教員数・日本語開設学校数の変化を示す。

表1　タイの初中等教育の日本語学習者数・日本語教員数・日本語開設学校数の変化(1990-2006)

年	日本語学習者数	日本語教員数	日本語開設学校数
2006	31,675	398	243
2003	17,516	236	165
1998	7,694	142	83
1993	4,247	72	35
1990	3,234	29	20

出所：『海外の日本語教育機関の現状』(1992)(1995)、『海外の日本語教育機関の現状・概要』(2000)(2004)(2007)から作成。

このように、日本語学習者数・日本語教員数・日本語開設校数とも大幅な伸びを続けていることが分かる。

タイの中等日本語教育のもうひとつの現状について、2008年2月2日にチェンマイで行われたセミナー（パヤップ大学タイ日センター主催「日本語教育ネットワークセミナー」）の席上、タイ教育省の講師から興味深いデータが明らかにされた。それによると、2008年2月現在にタイ教育省基礎教育委員会（คณะกรรมการการศึกษาขั้นพื้นฐาน Office on Basic Education Commission /OBEC）が管轄する中等学校（โรงเรียนมัธยมศึกษา Secondly School）の総数は約3,800校で、うち日本語開設校数は「307 校」であるという。また、中等タイ人日本語教員は、人材不足とポスト不足のために新規開講を希望する学校が新規雇用できないことが多く、その結果、中等タイ人日本語教員の充足は常に必要数に満たず不足しているという。

これは、日本語開設校数が、基礎教育委員会管轄中等学校数の「1 割にも満たない」現状を示す一方で、日本語新規開設への潜在的な需要が極めて高いことも示し、制度的に日本語教員の新規任用を増加させることができる状況が来れば、中等教育の日本語開設校数・学習者数共に大幅に上昇する可能性を示唆していると考えられる。

これらのことからも、中等教育における日本語学習者数は今後も増加が見込まれる。これを反映し、大学の日本語専攻の入学者に既習者と未習者が混在する状況も、既習者の比率がより増加する方向で継続すると見られる。従って、日本語の既習者・未習者の問題は「タイのほとんどの大学の日本語専攻にとって有効な教育的対処が今後も継続して求められる課題」だと考えられる。

なお、既習者・未習者が混在する状況への対処のひとつとして、一部の有力国立総合大学では、入試科目に日本語を義務付けることによって入学者を日本語既習者に限定する動きが徐々に現れ

ている（例：チュラーロンコーン大学日本語学科）。

しかし、基礎教育委員会管轄中等学校数に占める日本語開設校数の比率が1割にも満たない現状でこれが可能なのは当面、元々入学競争率が高く「地方クォーター入試」（後述）も採用しない、バンコク周辺に設置の一部有力国立総合大学に限られると予想される。地方国立総合大学は立地地方から必ず一定多数の学生を受け入れる「地方クォーター入試」により、当該地方の高等教育機会の保障と拡大の役割を果たしているため、地方の中等日本語開設校がそう多くない段階で既習者のみの受け入れに踏み切るのは難しい。高等教育マス化の役割を担い入学定員数が多く入学競争率が低いラチャパット大学や私大では、入学対象者を狭めてしまう措置はなおさら難しい。

北部タイの8大学に設置の9つの日本語専攻（国立総合2大学3専攻・ラチャパット4大学4専攻・私立2大学2専攻）では、2008年現在、既習者のみの受け入れはなされていない。

これらのことから、日本語の既習者・未習者に関して、大半の日本語専攻に今後もしばらく要求される対処とは「既習者と未習者の同時受け入れを継続した上でいかに有効な指導上の対処を行うか」であろうと考えられる。

このような課題であるにもかかわらず、既習者と未習者の在籍現状に関する実数や比率・学習者の意見などに関する教育機関を横断した調査は、これまでに結果が公表されたことがなく、横断した状況は一向に明らかではなかった。そこで北部タイ日本語教師会では、この課題に対する横断的調査の嚆矢として、今回の調査の実施と結果データの公開を行った。

4. 調査の目的と方法

4.1 調査の目的

次の情報について、北部タイの大学日本語専攻を横断した状況を明らかにするのを目的にした。

1. 日本語専攻課程の在籍学生が、日本語の「既習者」であるか「未習者」であるか。
2. 「既習者」の大学入学以前の日本語学習期間と学習時間数。
3. 1年生の時点での「既習者」と「未習者」の間のクラス分けの有無。
4. 在籍学生の、「既習者」と「未習者」の間のクラス分けに対する考え。

但し、2.は無回答が多かったため十分なデータが収集できなかった。

4.2 調査の時期と対象

2008年2月11日～2月15日に、表2に示す北部タイ（いずれもチェンマイ）の3大学の日本語専攻に在籍する1～4年生に対してアンケート調査を行った。5年以上在籍している学生はすべて4年生と見なした。ファーイースタン大学は日本語専攻開設3年目のため、1～3年生までが対象となった。また、各専攻へ「未習者と既習者を別クラスに分けているか」を問い合わせた。

表2　本調査を行った大学名と日本語専攻名・大学の類型

大学名・日本語専攻名	大学の類型

チェンマイ大学 日本語学科	国立総合大学
チェンマイラチャパット大学 日本語学科	ラチャパット大学
ファーイースタン大学 ビジネス日本語学科	私立大学

3章で述べた通り、現在北部タイには8大学に9つの日本語専攻が開設されているが、諸事情により全箇所を網羅した調査には至らなかった。そこで、タイの大学の類型のうち「国立総合大学」「ラチャパット大学」「私立大学」の3類型からそれぞれ1校ずつ抽出して上記3大学を調査対象とすることで、対象に一定の網羅性を与えた。

4.3 調査項目

アンケートの質問項目は表3の通りである。

表3 アンケートの質問項目

1. あなたは、大学に入学する以前に、日本語をすでに勉強していましたか
1. はい（既習） 2. いいえ（未習）
2. 1で、はい、と答えた方にうかがいます
勉強した期間は、どれくらいですか？
1. 1年 1. 2年 3. 3年 4. 4年以上
週に何時間勉強しましたか？
3. 大学1年生のとき、既習、未習のクラス分けは、ありましたか？
1. はい、ありました 2. いいえ、ありませんでした
4. あなた自身は、1年生のクラス分けについて、どう思いますか？
1. あったほうがいい 2. ないほうがいい
5. あなたは、日本語能力試験をうけたことがありますか？
1. ある 2. ない
6. 今あなたは 日本語能力試験の何級をもっていますか？
1. 4級 2. 3級 3. 2級 4. 1級
7. 3で質問した、既習・未習のクラス分けについて、勉強しやすかったですか？
問題や大変なことがあれば、書いてください。

4.4 調査方法

表3のアンケートをタイ語と日本語の双方で作成し、調査対象者自身に記入してもらった。

3大学が「未習者と既習者を別クラスに分けているか」どうかについては、各大学の担当者に直接問い合わせた。

5. 調査結果

5.1 全体的な結果

3大学に在籍する日本語専攻学生全498人のうち391人から回答を得た。平均回答率は79%であった。大学ごとの総在籍者数・回答数・回答率・既習者と未習者のクラス分けの有無は、表4の通りである。(回答数と回答率は、質問項目の一部のみ無回答であったのも有効として数えた。)

表4 調査先の3大学の日本語専攻の総在籍者数・アンケート回答数・回答率・既習者と未習者のクラス分けの有無

大学名	総在籍者数	回答数	回答率	既習者と未習者のクラス分けの有無

チェンマイ大学	238	189	79%	なし
チェンマイラチャパット大学	226	175	77%	1年生のみあり。 2年生以降は合同。
ファーイースタン大学	34	27	79%	なし
合計（平均回答率）	498	391	(79%)	

%は小数点以下四捨五入　%以外の単位：人

以下では、表3の質問項目のうちから特に、質問1・質問4・質問7への回答から得られた結果と分析を報告する。質問2（4.1「調査の目的」第2項に対応）については有効回答が少なかったために取り上げない。質問5と質問6も参考情報としての質問であったので取り上げない。

質問1・質問4・質問7の回答を、以下の5項目にまとめて、表5から表9に示す。

1. 全回答数のうち日本語「未習者」と回答した者と「既習者」と回答した者の数と比率（表5）
2. 全回答数のうち1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と比率（表6）
3. 全回答数のうち1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と学年別詳細（表7）
4. 「未習者」と回答したうち1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と比率（表8）
5. 「既習者」と回答したうち1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と比率（表9）

表5　全回答数のうち、「未習者」と回答した者と「既習者」と回答した者の数と比率

大学名	実数				比率		
	全回答数	既習者	未習者	無回答	既習者	未習者	無回答
チェンマイ大学	189	100	89	0	53%	47%	0%
チェンマイラチャパット大学	175	72	101	2	41%	58%	1%
ファーイースタン大学	27	17	10	0	63%	37%	0%
合計	391	189	200	2	48%	51%	1%

比率は小数点以下四捨五入したため、実数があっても0%となる場合・比率合計が100%とならない場合がある。実数の単位：人

全回答数の合計から、在籍者は「既習者48%」:「未習者51%」と、両者がほぼ拮抗するのが明らかになった。特筆されるのは、全回答数に占める既習者の比率が48%と「既習者が半数近くに達している」点である。

大学ごとの比率は、ファーイースタン大学の既習者の比率が63%に及び、チェンマイ大学の既習者の比率も53%に及んだ。チェンマイラチャパット大学は41%で未習者の比率の方が上回った。

大学の類型から見る既習者比率の高低は、高い順に

1.「私立大学」（ファーイースタン大学）　63%

2.「国立総合大学」（チェンマイ大学）　53%

3.「ラチャパット大学」（チェンマイラチャパット大学）　41%

となる。但し、ファーイースタン大学については3年生までの在籍しかなく、総在籍者数でも27名と他2校の1/6～1/7の規模でしかないため単純な比較にはならず、参考にとどめるべきと思われる。ここでは入学競争率が高い「国立総合大学」のチェンマイ大学で既習者比率が半数を超えている点が注目される。

表6　全回答数のうち、1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と比率

大学名	実数				比率		
	回答数	あったほうがいい	ないほうがいい	無回答	あったほうがいい	ないほうがいい	無回答
チェンマイ大学	189	111	77	1	59%	41%	1%
チェンマイラチャパット大学	174	131	42	2	75%	24%	1%
ファーイースタン大学	27	6	21	0	22%	78%	0%
合計	390	248	140	3	64%	36%	1%

比率は小数点以下四捨五入したため、実数があっても0%となる場合・比率合計が100%とならない場合がある。実数の単位：人

全回答数の合計では、「あったほうがいい」が「ないほうがいい」を上回り64%となった。チェンマイ大学とラチャパットチェンマイ大学では「あったほうがいい」が上回ったが、ファーイースタン大学のみ「ないほうがいい」が逆転して78%となった。

表7　全回答数のうち、1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と学年別詳細（実数）

学年	1年		2年		3年		4年		合計
大学名　/　回答	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	
チェンマイ大学	37	29	15	12	46	25	13	11	188
チェンマイラチャパット大学	26	2	40	9	17	8	48	16	166
ファーイースタン大学	5	7	1	8	0	6	---	---	27

回答は「あったほうがいい」をYES、「ないほうがいい」をNOとした。　単位：人

チェンマイ大学とチェンマイラチャパット大学はともに、全学年でクラス分けは「あったほうがいい」（YES）が「ないほうがいい」（NO）を上回っている。しかしファーイースタン大学はこの結果と相反し、全学年で「ないほうがいい」（NO）が上回っている。

上記から、各大学で学年が上がっても日本語の学習が進んでも、「既習者」と「未習者」で別クラスへ分けることへの意識傾向があまり変動せずに維持される点が指摘される。

表8　「未習者」と回答したうち、1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と比率

大学名	実数				比率		
	未習者数	あったほうがいい	ないほうがいい	無回答	あったほうがいい	ないほうがいい	無回答
チェンマイ大学	89	61	28	0	69%	31%	0%
チェンマイラチャパット大学	101	73	27	1	72%	27%	1%
ファーイースタン大学	10	2	8	0	20%	80%	0%
合計	200	136	63	1	68%	32%	1%

比率は小数点以下四捨五入したため、実数があっても0%となる場合・比率合計が100%とならない場合がある。　実数の単位：人

全未習者の合計では、「あったほうがいい」が 68%を占めた。しかし、大学ごとでは、ファーイースタン大学では「ないほうがいい」が逆転して80%を占めた。

表9　「既習者」と回答したうち、1年生の授業を未習者と既習者で別クラスに分けるのが「あったほうがいい」と回答した者と「ないほうがいい」と回答した者の数と比率

大学名	実数				比率		
	既習者数	あったほうがいい	ないほうがいい	無回答	あったほうがいい	ないほうがいい	無回答
チェンマイ大学	100	49	50	1	49%	50%	1%
チェンマイラチャパット大学	72	58	14	0	81%	19%	0%
ファーイースタン大学	17	3	14	0	18%	82%	0%
合計	189	110	78	1	58%	41%	1%

比率は小数点以下四捨五入したため、実数があっても0%となる場合・比率合計が100%とならない場合がある。実数の単位：人

全既習者の合計では「あったほうがいい」が「ないほうがいい」を上回り58%を占めた。しかし、大学ごとの結果は三様となった。チェンマイラチャパット大学では「あったほうがいい」が8割を占めたが、ファーイースタン大学では「ないほうがいい」が8割を占めた。チェンマイ大学では両者が拮抗している。

5.2　調査結果の大学ごとの傾向と分析

5.2.1　大学ごとの傾向

表5〜9に示した結果から、大学ごとの傾向をグラフで示すと次のようになる。

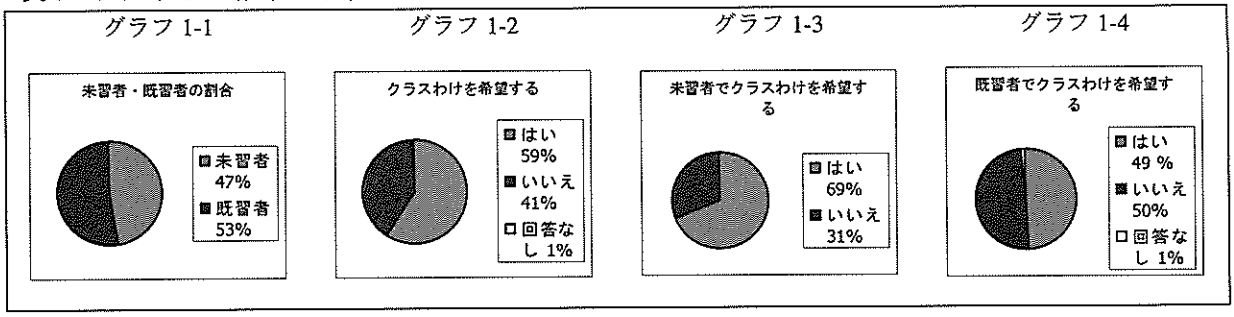

図1　チェンマイ大学

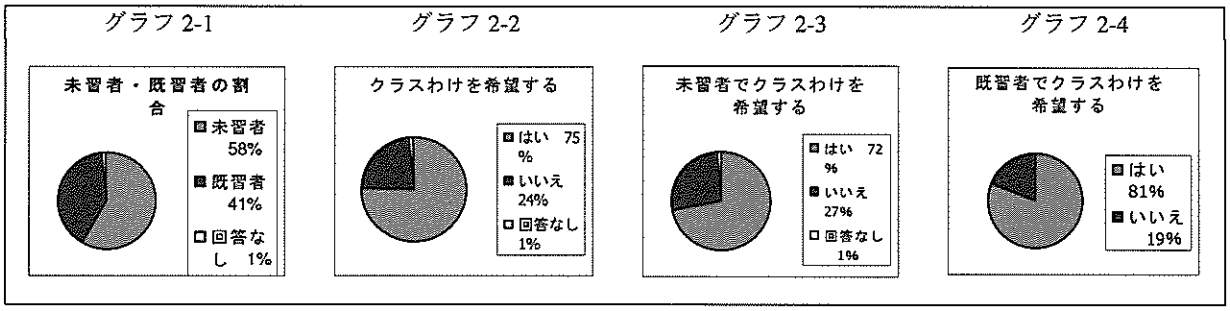

図 2　チェンマイラチャパット大学

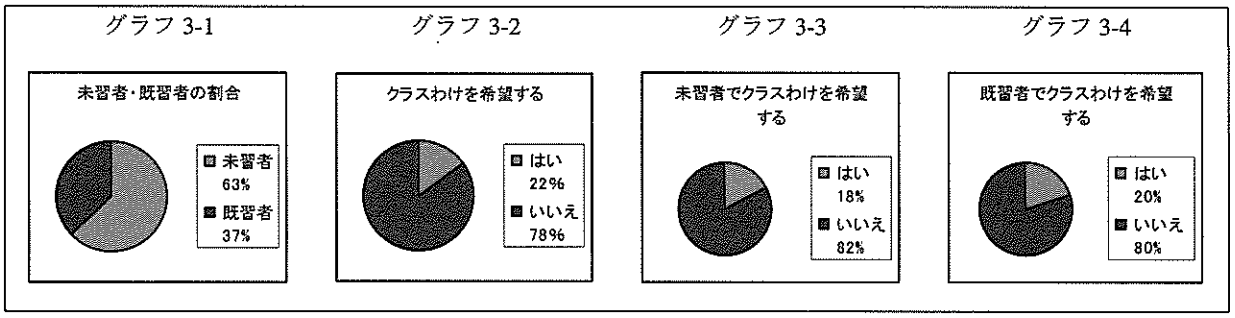

図 3　ファーイースタン大学

5.2.2　大学ごとの傾向の分析

チェンマイ大学では、既習・未習の回答者比率は同じくらいであるが、クラス分けについて「あったほうがいい」と「ないほうがいい」の比率は、回答者全体では 6 対 4 で「あったほうがいい」が多かった。既習者と未習者でそれぞれに比率を見ると未習者は 7 対 3 で「あったほうがいい」が多いが、既習者では「あったほうがいい」と「ないほうがいい」が半々という結果となった。

チェンマイラチャパット大学では、既習・未習の回答者比率は 4 対 6 で未習者の方が多いが、既習者と未習者のクラス分けについては「回答者全体」「未習者」「既習者」のすべてで、7 割以上が「あったほうがいい」と回答している。

ファーイースタン大学の場合は、既習・未習の回答者比率は 6 対 4 で、既習者と未習者のクラス分けについて「回答者全体」「未習者」「既習者」のすべてで「ないほうがいい」が「あったほうがいい」を上回る結果が出ている。

5.3　自由記述による未習者と既習者のクラス分けに関する意見の結果

自由記述式で回答してもらった未習者と既習者のクラス分けに関する意見を、内容ごとにカテゴリー分けしてまとめたものと、該当した意見の数を、表 10 に挙げる。既習者が未習者の立場から回答したり、未習者が既習者の立場から回答したりしているので、回答者が既習者か未習者かには分けずにまとめた。

表 10　自由記述による既習者と未習者のクラス分けに関する意見

意見のカテゴリー	チェンマイ大学	チェンマイラチャパット大学	ファーイースタン大学

A.学生間の差（人間関係、情報など）、基礎を固めるため分けるとついていけない／分けないとついていけない	81	93	4
B.高度の日本語力をもとめる	12	15	0
C.スピード（ついていけない）、理解が深まる	35	36	3
D.成績の差、成績が不公平になる	23	8	0
E.学生間で教えあうことができる	26	24	0
F.精神的（やる気、ストレス、日本語が嫌になる）	52	40	0
G.教師の事情	13	20	0

※　1 件の回答意見が複数のカテゴリーにまたがる場合には、それぞれのカテゴリーでカウントしたので、表中の数の合計は自由記述意見の回答総数ではない。

表 10 の A～G のカテゴリーの代表的な意見を、各大学ごとにいくつか紹介する。

＜チェンマイ大学＞・未習者は、基礎をしっかり学んでから既習者と同じクラスで勉強した方がいい（A）・既習者は学校により学んできたことが異なるので、一緒に勉強して基礎を学んだほうがいい（A）・教師ができる学生にスピードをあわせる（C）・分けることで既習者・未習者の差が大きくなり、既習者についていけなくなる（C）・未習者がストレスを感じ日本語が嫌いになる（F）

＜チェンマイラチャパット大学＞・既習者にとって復習になる（A）・自分にあった内容を学べる（A）・未習者の存在が邪魔になる（C）・未習者がゆっくり学べる、既習者は待つ必要がない（C）・未習者にプレッシャーを感じさせない（F）・既習者についていけないことで落ち込む（F）

＜ファーイースタン大学＞・基礎ができていない学生は、単語を覚えるのも勉強についていくのも大変（A）・少しずつ進歩するからいい（A）・授業が早くて覚えられない（C）

※カッコ内アルファベットは、カテゴリー種別

6. まとめと課題

今回の調査で、表 5 に示した 3 大学の日本語専攻在籍者からの全回答の平均による「既習者」と「未習者」の割合は「既習者 48%」:「未習者 51% 」となり、「既習者が半数近くを占める」に至っている横断的状況が明らかになった。大学の類型に従った既習者比率の高低では、「私立大学」（ファーイースタン大学）63% 「国立総合大学」（チェンマイ大学）53% 「ラチャパット大学」（チェンマイラチャパット大学）41%の順となったが、ファーイースタン大学は日本語専攻開設 3 年目で 3 年生までの総在籍者数 27 名と著しく学生規模が小さく単純な比較はできない。入学競争率が高い国立総合大学のチェンマイ大学で半数を超える既習者を集めている点が注目される。一方、既習者と未習者のクラス分けは表 4 の通り、ラチャパットチェンマイ大学のみ 1 年生にだけ実施し、既習者比率が半数を超えるファーイースタン大学とチェンマイ大学は実施がなかった。

1 年生のクラス分けが「あったほうがいい」か「ないほうがいい」かに対する学生の学年別の考えは表 7 に示したとおり、チェンマイ大学とチェンマイラチャパット大学では「あったほうがいい」が 1～4 年生まで一致して上回っているのに対し、ファーイースタン大学では「ないほうが

いい」が1〜3年生まで一致して上回り、傾向が分かれた。

興味深いのは、クラス分けに対する学生の考えの各大学の回答傾向が、大学ごとに1〜4年生ないし3年生まで学年を超えて同傾向を示す点である。調査前には「既習者と未習者の日本語学力格差が顕著な1年生ではクラス分け希望が高く、格差が縮小傾向になる2年生以降では希望が減る」との予想があったが、実際の学生の意識は「上級学年になってもあまり変化しない」と言えそうである。これはクラス分けが「あったほうがいい」が「ないほうがいい」を1〜4年生まで上回ったチェンマイ大学とチェンマイラチャパット大学の学生で言えば、入学時の既習者と未習者の間の日本語力の格差及びそれに起因する諸問題を、上級学年になっても様々な形で意識し続けている可能性を示唆すると思われる。

今後の課題のひとつだが、本調査では「既習者」を一様に扱い、個々の既習者の日本語力の到達度や差異については無視した。しかし「既習者」は今後一層の増加が予想され、様々な側面がより明確にされる必要がある。「既習者」個々人の日本語の到達度は極めて個別的で統計的な計量は難しいが、3 章で述べたとおり、大学での日本語既習者の増加は中等学校での日本語学習者の増加の反映だと考えられるため、中等教育の日本語カリキュラムと日本語科目の設定の類別（専攻外国語・選択外国語・活動等）を踏まえて、既習者が学習していると考えられる日本語のレベルと内容の類型を整理する作業や、個別の既習者がどの類型に該当するかを調査して日本語力を類推する作業に一定の有効性があろうと考えられる。

付記　本稿作成までの作業分担

本稿作成までの作業分担は次の通りである。調査計画の策定は主にサラニットが行った。調査項目の策定は主にサランヤーと小川が行った。調査はサラニット・八巻・小浦方・二口・サランヤー・塚本・志摩が行った。集計は二口が行い小浦方とサランヤーが補佐した。分析は主にサランヤー・小川・二口・八巻・海老原が行った。本稿のまとめは1〜4章と6章及び付記は主に海老原が行い、5章は主に小川が行った。本稿全体の構成は海老原が行った。

参考文献

国際交流基金日本語国際センター編（1992）『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・1990年』大蔵省印刷局

国際交流基金日本語国際センター編（1995）『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・1993年』大蔵省印刷局

国際交流基金日本語国際センター編（2000）『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・1998年　概要』大蔵省印刷局

国際交流基金編（2004）『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・2003年 概要』凡人社

国際交流基金編（2007）『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・2006年 概要』凡人社